



向井貴彦さん

私が研究しているのは、淡水の生き物が地域ごとにどう違い、その違いがどのように生まれてきたのかということなんです。

日本列島には場所ごとに違う生き物がいて、同じ種類でも遺伝子には地域ごとの差があります。その違いがどう生まれたのかを調べるのが、進化を理解することにつながると思っています。

だからこそ、外来種の問題には強い関心があります。外来種というと、在来種を食べてしま

多様な自然 豊かで面白い



絶滅危惧種のウシモツゴ

うとか、数を減らしてしまうことが注目されます。でも私が一番気にしているのは、何百万年もかけて積み重ねられてきた自然の歴史が失われてしまうことです。

地域ごとに少しずつ違う姿になろうとしていた生き物が、人の手によって混ざってしまう。私は歴史が巻き戻されるようなものだと考えています。その土地ならではの自然の個性が失われてしまつことでもあります。

地域ごとに違う生き物がいるから、旅先で見慣れない魚や植

生き物 地域ごとの違いは財産

物に出合えるんです。その土地ならではの自然がある。それが面白いし、生物多様性の土台でもあると思っています。地域ごとの違いは、私は大切な財産だと考えています。

その象徴が、絶滅危惧種のウシモツゴです。岐阜、愛知、三重の3県だけに生息する日本固有種ですが、今では野生の生息地は10カ所にも満たず、ため池にわずかに残るだけです。水田整備や都市化で生息環境が失われ、さらにブラックバスやブルギルなどの外来魚が放流されれば、小さなウシモツゴは生き残ることができません。

生息地を守るだけではなく、新たな生息環境を復元し、個体数を増やす取り組みも進めています。その時に大事なのがDNAです。同じウシモツゴでも地域ごとに遺伝子には違いがあります。その違いも、その土地が歩んできた歴史の一部です。だから保全するときも、地域ごとの特徴を失わないようにしています。

自然をどう守るかに正解はありません。外来種を受け入れるのか、それとも今ある自然を残

すのか。それは社会が決めることです。研究者が決めることではありません。私たちの役割は、それぞれの選択をすれば自然がどう変わるのかを科学的に示すことだと思っています。

一人の生き物好きとして、個人的には地域ごとに違う生き物が残る自然の方が豊かで面白いと思っています。その地域にもともと何がいて、どんな歴史をたどってきたのかを知ることが、過去を調べるためだけではありません。未来にどんな自然を残していきたいのかを考える土台にもなる。その思いで、これからも地域の自然の歴史を調べ続けたいと思っています。

(構成・平子宗太郎)

むかい・たかひこ 地域科学部地域政策学科教授、専門は魚類などの生態学。東京大学大学院修了。博士(理学)。1971年生まれ。

